

模擬国連 事後アドバイス

2017 年 1 月 20 日

かえつ有明 模擬国連顧問

関 孝平

はじめに

年末の「模擬国連@かえつ有明 2017 年夏の陣」にご参加いただきありがとうございました。3 会場とも質が高い会議であったと率直に思っております。これもひとえに渉々フロント団、大使の皆さん、そして顧問の皆さんのお力添えの賜物です。主催校を代表して、心よりお礼を申し上げます。

皆さんにとって今回の会議がより有意義なものとなるよう、事後の振り返りとアドバイスをまとめさせていただきました。事前のアドバイスではご紹介できなかった点も含めて、本校の高 2 の動きを中心に共有させていただきます。

1 本校の 2 ペアの担当国

本校の高 2 ペアは A 議場で、A 君、B さんが日本、C 君、D さん、中 3 の E さんがエクアドルを担当しました（それぞれの特性などは事前のアドバイスにまとめていますので、改めてご確認ください）。

今回は高 2 の 4 人がそろって参加する最後の会議ということもあって、苦手なことや克服すべき課題をあえて避けさせずに真っ向からぶつからせて、きついハードルを越えさせたいと思っていました。

A 君、B さんはクリップ型で国と国を結んでいく多角的な交渉はある程度できるようになり、B さんのコミュニケーションを動力にしてどの会議でも中心に入れるレベルになってきました。B さんは調和的なコミュニケーションでは天才的な力を発揮するのですが、前々からハードコミュニケーションを苦手として、それゆえに大国や先進国を苦手としていました。今回彼らが担当した日本は島国、内向き志向ということもあり、先進国の中でも圧倒的に移民受け入れができていない国で、多文化共生にもっとも不慣れな国であると言えます。一方、「労働力の確保」のために移民政策は切迫した課題で、そのジレンマに直面しています。またヨーロッパのように数の原理で優位性を簡単に作れず、まさにガツガツ強気に当たりにいかないとスポンサーを集められない国でした。

C 君、B さんは、バランスという点では A 君、B さんのペアよりも上ですが、まだ 1 回しか一緒にペアを組んだことがないということもあり、まだ粗さが目立ち、政策も抜けが多いし、コミュニケーションの幅も狭いということが課題でありました。また、お互いの役割を分離しすぎていて、狭い動き方しかできないのが難点でした。今回担当したエクアドルは受け入れも送り出し

も多く、また地域性に縛られることもないので、その柔軟性をうまく生かし、複数の視点を持ち、コミュニケーションでつないでいくことを課題にさせました。極端な攻め方ではなく、常にシナリオを頭で書き換え、2人で協力して交渉の相手を広げることように指示していました。また、このペアは内政・外交という役割をはっきり分けないことが強みだったので、それぞれがシングルとして動くなかで、「どのようにして複数のグループのブリッジになっていくのか」「いかにして中間的な立場を最大限利用して多面的交渉を実現するのか」ということを最も意識させました。

2 前日の政策作り直し

今回の会議、私が忙しくて、彼らの政策を初めて確認したのが実は前日 25 日の夕方でした。ところが、その時点で論点と政策がずいぶんずれており、全体のシミュレーションもできていませんでした。彼らの主眼は論点 3 の WFP 支援の部分にあてられていましたが、やはり論点 1、2 がメインとして政策を練れていないと「移民の受け入れ構造」といったもっとも根本の議論ができず、議場からあふれ出てしまいます。そこで前日の夕方にもかかわらず、2 国とも論点 1、2 について、全面的な政策の作り直し、シミュレーションのやり直しを指示しました。正直ここは心苦しいところでした。前夜に政策を作り直すことで、むしろ崩れてしまう可能性もあります。それをわざわざ最後の会議でさせるのかどうか、、、いや、でも、最後の会議だからこそ妥協せずに指導してあげなくてはいけないと思って、無理を承知でやり直すことになったのです。

さて、どこから始めるか。まず論点をもう一度整理しなくてはなりませんよね。そこで、第 9 回全日本大会の報告書に載っている決議案の要約 (P15) を全員に配布して、「それぞれの決議案がどのようなグループによって提出されたのかを根拠をもって示せ」という議論させました。報告書には答えは載っていないのですが、たった 3 行の要約文でも、しっかり論点を把握していると大体のスポンサーグループのイメージが浮かんできます。そしてそのイメージをもとに各国の状況と立場を整理していきました。その際、あわせて重要視したのが、決議案の中に隠れている「行動責任の主体」を見つけることです。会議シミュレーションができれば、その決議案によって「誰が」責任を負い、「誰が」どう解決行動をとらなくてはいけないのか、ということが見えてきます。それを踏まえ、「この決議案だと、どの国がどう行動しないといけないのか」という DR に隠された主語、動詞を掘り起こしていきます。次に、各決議案に自国の立場から賛成できるか、その理由と残されている交渉の余地は何かということを議論し、自国の政策を見つめ直しました。この作業はとても有益であり、彼らの政策立案やり直しに大きなヒントとなったようです。なお、事前アドバイスの 14 ページで紹介した通り、報告書にある決議案サンプルを使って、アmend提出後のモデの練習もおこないました。7 分ぐらいで読み、①具体性、②実現可能性、③透明性の 3 点に絞って「DR の速読と質疑の練習」をしたのです。2 国とも質の高い質問を出すことができました。

3 論点の整理

上記の論点整理について、2カ国にアドバイスしたことを共有します。

まず、論点1は「どのように頭脳流出を制限し、循環させるか」ということですが、実はこの論点はとても難しいのです。頭脳還元をしようという総論は賛成できたとしても、「どのように」頭脳還元をするのかという手法はあいまいだし、具体的に提示するのが難しい。頭脳還元をするシステムっていったいなんなんでしょうね？言葉でいうより、実際の政策立案は難しいですね。ビザの制限というような政策も考えられますが、これは即時対応に分類され、短期的政策にしかなりません。でも中期的、長期的視野に立つと何ができるのでしょうか。その観点から、とくに後進国のエクアドルに考えさせた探究課題があります。「移民による頭脳流出」というのは表面上の事象にしかすぎません。その下に「知と技術の国際格差」という本質的探究課題があります。なので、頭脳流出ではなくて「これは格差問題なんだ」という課題の書き換えをさせ、その意識から中期、長期の政策を考えるように指導しました。頭脳還元というとしっくりこなくても、国際格差を訴えることで納得度も自然と得られます。

論点2は「非正規移民の制限をどのように設け、どのように対応するのか」ということです。これには、「企業の雇用責任、国の受け入れ責任、人権保護」というものが含まれるという視点に落とし込むことがまず必要です。ここで、この論点のとらえ方を受け入れ側と送り出し側の視点から考えてみましょう。立場が違えば同じ事象に対しても使う言葉が違います。まず「管理」という言葉は、国境警備も含めて受け入れ側の論調です。一方で「保護」という言葉が送り出し側の論調になります。

エクアドルの国益の整理

エクアドルとして気を付けたいこととして、「非正規移民の管理」にはあまり触れてほしくないということもありました。エクアドルは近隣から多くの非正規移民を受け入れている国ですが、その理由は移民に寛容だからではなく、移民の管理能力がないだけです。特にエクアドルは国境警備も含めて自己管理能力がなく、移民の数を把握すらしていなければ、正規も非正規も区別ないほどにコントロールできていません。その状況で「非正規移民」の減少や管理を受け入れ側の責任として求められても、自国にはその能力はないし、自分の首を絞めるので避けなくてはなりません。一方、エクアドルは自国出身の移民を受け入れているスペインをはじめとしたヨーロッパ諸国には「保護責任」を負わせたいわけです。その観点から、ILOの現存の監査システムを利用し、移民受け入れの企業責任を求める法的整備を求めることも有効です（この政策で責任を負わされるのはエクアドルの移民を受け入れているスペインなどの国です）なので、彼らのトップラインはあくまでも「移民の保護、受け入れ責任」です。そして「管理」に話が及んでも、管理不能な「非正規」をターゲットにするのではなく、「移民と受け入れ責任」という全体像で語ってもらうことが第二次ラインでした。その案を受け入れていくにしても人的、資金的支援を取り付けることが絶対条件になっていきます。

日本の国益の整理

日本はとても整っている国です。移民がいないけど、これだけ社会が安定していて、治安も安定している国はない。一方で、ヘイトスピーチに見られるように、他者、多文化に対して慣れていない。だからと言って、アメリカのような移民排斥を訴える必要はないし、そういうスタンスはとりたくない。なぜなら今は移民による問題は限定的かつ小規模だからです。でも、超少子高齢化のトップランナーである日本は、これから移民を受け入れることのジレンマと自国の現状を守ることとのジレンマに挟まれるわけですね。「受け入れなくてはいけないけど、受け入れたくない」という本音をどう実現するのか。その中で、日本がしっかり求めたいのは「受け入れ国（つまり日本）が移民受け入れをコントロールできる権利と制度」ですね。ここで日本にキーワードとして意識させたのは「正しい／正しく」という言葉です。正しい移民を正しい量だけ、正しいタイミングで受け入れたい。そして、その「正しい」の基準作りや判断、運用は自国でしたい、ということです。また、正しく受け入れるために、非正規移民や審査の管理を強化したいと思っている。ただ、日本はある意味、排斥を表だって訴えることは嫌いですし、移民問題が限定的な現状で多国間主義に反することを叫びたくない。それに実情としては、労働力の確保は切迫した課題であり、「正しい移民であれば正しく雇用したい」という思惑もあります。では、その「正しい移民、正しく受け入れる」を実現するにはどうしたらよいのか、ということが政策立案の核になります。そういう意味では、企業の受け入れ責任などについては送り出し側と歩み寄れるかもしれないし、ILO による視察は、不法移民を追いつ返し口実になるのでむしろいいのかもしれない。

このようなアドバイスをしたのですが、これらは全て前日 17 時に与えたフィードバックです。前夜の時点でリサーチをするにも限界があるため、自分たちの不足を補ってくれるパートナー国を早い段階で作るように合わせてアドバイスをしました。自分たちがリードしつつも、他国のリサーチや政策をどんどん利用し、うまく組み立てるとともに全体の納得度を上げていきたい。また政策立案が不十分な部分が目立たないように、とにかく目玉政策、最重要論点だけはガンガン行き、譲るなという意識です。もともと 2 ペアとも「スモールベースボール」のコミュニケーションで議場をまとめていく特性なのですが、こうなるとますます走りまわらないといけなくなりました。前日の時点のフィードバックをどこまで反映できるかかなり心配でしたが、次の日にはほぼほぼ大枠の修正ができており、資料も整っていました。多少迷走をしながらも、しっかりと考えて動いていたと評価しています。

なお、両ペアとも、以下のような全参加国のデータをエクセルにまとめ、ポジションを把握するとともに、交渉の際に客観的な根拠を出せる準備をしていました。

	GDP	RANK	Migrant People	RANK	送出or 受入	Brain Drain (%)	食料 自給率	人口 増加率	RANK	Others
Afghanistan	112	39	66,738	39	送出国			3.45	1	テロリスト(=非正規移民)が侵入 自国の内政が不安定
Algeria	55	33	131,192	37	送出国			1.51	13	教育投資の無駄 非正規移民に対する差別
Argentina	21	18	2,164,524	20	受入国			0.98	24	研究費削減が頭脳流出へ
Australia	13	12	7,035,560	9	受入国	20+	230	1.07	20	
Bangladesh	46	28	1,500,921	23	送出国			1.42	15	

4 30 秒のモデ

全体場で存在感を出し、議論をリードするにはモデとスピーチです。ということで、モデは強化対象で、前日に毎回 30 秒のモデの練習を行っています。今回もいつもに負けずとも劣らずダメダメだったので、そこを突っついて本番までに修正させます。ポイントにしていることは 3 つあります。

出だしのフック

30 秒と言ってもまず出だしです。淡々と 30 秒のスピーチが 40 か国も続く中で、普通に論点を理路整然と話しているだけでは右から左に受け流されてしまうだけです。そこで、下を向いている聞き手の顔を引き上げるような出だしと話し方で自分の話に注目させます。最初にひと工夫入れるだけで、相手の注目を得られます。プレゼンで言うと「フック (hook)」ですが、いくつかのパターンを私が紹介し、それをヒントに組み立てます。

今回エクアドルは「みなさんは自国の移民の数を公表できますか。」というメッセージを訴えることから始めたように記憶しています。これは移民の数を把握できていない後進国の課題を論点につなげていくためです。一方、日本は「〇千万、、、これは私たちが今後労働力を確保するために受け入れていかなくてはいけない移民の数です」と始め、移民受け入れ国としてのジレンマを数字という FACT によって提示しました。

最重要論点に絞るメッセージ

次に「全部を説明するな、最重要論点のメッセージだけでいいからはっきり伝えろ」ということです。30 秒しかない中で全てを伝えることは無理です。また「伝えたいことは全部話したい」と思うのが人間の心理ですが、実際は話したことの一部しか相手の意識には残りません。だったら、「この論点だけは絶対伝えたい」というものを縛り、そのメッセージだけでよいからしっかりインパクトを持って伝えろ、ということです。

納得度を訴える

3 つ目に、本校のペアは論点以外にもう 1 つのメッセージを送っています。自分たちの DR や発言の納得度を高めるメッセージです。具体的には「自分たちの DR が全体の国際益につながるのだ」ということと「なぜこの課題解決には国際協調が必要なのか」という 2 つの要素です。エクアドルが「私たちは中間的な立場にいて、多くの国と共通した課題を抱えています。私たちの考えは多くの皆さんにとっても有益であり、私たちだからこそつなげることが多くあります」といったようなことを話したと思います。

5 アンモデ開始の動き

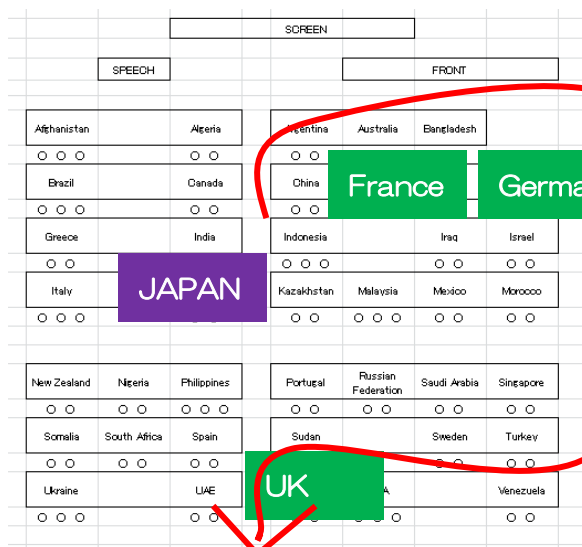
みなさん、最初のアンモデが始まったら「〇〇来てください！！」といったように声を上げてグループを集めますよね。その時、どう動いていくか考えていますか。どこと組むかと言う会議行動ではありません。どう歩き始めるか、ということです。本校では、実は最初のアンモデで他国を呼び込む際に、どう歩き、どう声をかけるのかも戦術として考えます。ここは会議行動に支障が出るため公表できませんでしたが、当日の動きを見てほしかったところです。

例えば議場後方に集まるとき、一人は指定した後ろに向かうのですが、もう一人は必ず別の方向に歩き出していきます。2人で「〇〇集まってください」と声をかけて集まってくれる国を待つのではなく、片方は自分から捕まえにいくのです。A君、BさんのペアではBさんがその役目を担っています。ですので、彼女は「後方に集まってください」と声かけておきながら、前に歩き出し、議場全体に声掛けをし、インナークラップで来てない国がいたら、そこに直接入って声掛けをしに行きます。その後も、アウトークラップを形成する役目があるので、彼女は終始後方の自国グループに入ることはありません。A君もただ単に後ろに人を呼ぶのではなく、「必要な国を取りこぼさないように」と考え、彼なりに歩くルートを考えています。A君が書いてくれた今回の振り返りレポートにそのことが記載されていますので、以下に共有します。ちなみに、A君とBさんは別の会議で、この動きが不十分だったために必要な国を初期段階で取りこぼした失敗経験があったので、特に2人はその反省を生かし、意識して動いていたはずですよ。

エクアドルも基本同じ動きをするのですが、彼らは日本以上にシングルでの動きを強めていくので、それぞれが連絡取りながら別々にグループ組みをしようとしていたはずですよ。

A君の振り返りより ― グループ集めの鉄則

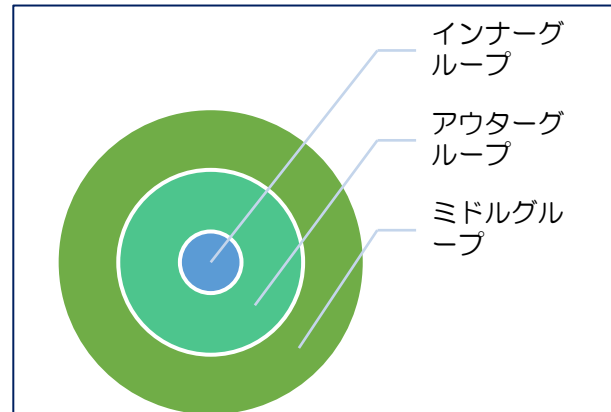
メモに対して好意的な姿勢を持ってくればそれでよいが、特に経験者などはあまり好意的になってくれないときがある。その時は、議場のグルーピングする場所を見極めるべし。最初のアンモデでの動き方は言葉では説明しにくいので以下の図で。



組みたい国のそばを通る！これが原則。議場をなるべく大回りして、拾える国は拾っちゃう。

6 グループのシミュレーション

2つの国がインナーグループ、アウターグループをどう設定したのかを簡単に説明します。まず日本ですが、彼らが最大のパートナー国に定めていたのはイギリスです。イギリスと日本は移民の受け入れ状況は異なりますが、移民を嫌ってEU離脱に傾いたイギリスと「受け入れ国が正しく移民を管理したい」と思う日本の利害は一致している部分が多くあります。本来はもう少しインナーグループも数がほしいのです



が、日本は難しい立場なので本当の意味でインナーに設定できるのはイギリスぐらいでした。そこはハードネゴシエーションでアウターの国を取り込み、初期段階から壁を突破しなくてはなりません。実際に、EU内で移民を大量に受け入れ、社会問題に直面しているドイツ、フランスと一緒に組み、受け入れ国としてのグランドルールを作りたいという目論見がありました。ただし、ドイツ、フランスはEU加盟国で、シェンゲン協定（EU内を無検査で行き来できる協定）もあるので、イギリスほど国益一致ができないかもしれません。実際に、最初はこの2カ国も日本のグループに入っていたようですが、途中でギリシャのグループに移ってしまいました。ここは日本の2人も認めている今会議の「最初の失敗」です。日本、イギリスのグループを確固たるものにするにはドイツ、フランスとの連携は絶対条件の1つに設定していたからです。今回の移民問題は、EU内での人口移動が激しいため、EU内に受け入れと送り出しの2つの立場が入りこみ、国益対立もあります。「EUだから」といって実は1つにまとめるのは難しい問題だったはず。そこを分かっていたはずの日本、しかも国と国を結ぶクリップ型交渉を得意としていた彼らが「グループに取り込めて安心していた」スキに、逆に相手に持っていかれてしまったのです。ここは以下で述べるギリシャのうまさもあったのですが、日本がしっかりと国益を丁寧に説明し、相手の立場からも納得させていけば違う形になっていたかもしれません。

グループ形成に際して、定石はインナーグループ、アウターグループの2つをまとめていくことですが、シミュレーション段階では、日本はフィリピンやインドネシアなどのアジア諸国と折衝する案も考えていました。これらの国は移民を送り出しているグループなのでミドルグループ～アウトレンジグループに位置する国々です。受け入れる日本と送り出すアジア諸国と国益は異なるけれど、早い段階でその2つのグループをつないでいければ、一気に送り出し国と受け入れ国のブリッジができるという大連立案です。ただ、今回は自己グループを形成するだけでもハードな立場だったので、大連立は見送り、インナー、アウターと順番に固めていくオーソドックスな形にしたようです。

エクアドルはスペインなどの西欧諸国に移民を送り出していますが、一方で隣国からも多く受け入れています。そんな彼らがインナーグループに設定したのはEUに移民を送り出し、移民の適正な保護を求めるトルコや北アフリカ（特に地中海隣接諸国）です。アウターグループは地域

は違えども移民を送り出している後進国で東南アジア、南アジアをベースに考えていたはずです。

7 特筆すべき2カ国の動き

特に存在感が際立っていたのはギリシャ、UAE の2カ国です。ギリシャは今回、私の事前アドバイスをもとにして2人がシングルとして動き、ダブル内政を試みたそうです。個々のスキルが際立っているので、最初はいつもと違う動き方に苦労もしたようですが、見事に2つのグループを形成していました。しかも、EU とアフリカ・中東を軸に一気に送り出し側と受け入れ側の異なる立場をまとめる「大連立」を仕掛けていました。これには地理的にも国益的にも中間立場を取れるギリシャだからこそより効果的に機能したのでしょう（事前アドバイスで紹介したエジプトの例と同じです）。実は、ここにもギリシャの「うまさ」が隠されていました。ギリシャは財政破綻もあり、実は移民を多く出しているのですが、彼女たちはモテでもスピーチでも「送り出し国」ではなく、「中継国」という立場を強調していました（本校のエクアドルはそこにとっても違和感を感じていたそうです）。あくまでも「中継国」という立ち位置から攻めることで、両グループのブリッジ役を担いながら自国の国益を守るDRを作っていました。これがどちらかに偏った立ち位置であれば、動き方が変わっていた部分もあるかもしれません。確かにシングルとして動き、しかも大連立を仕掛けていくのは時間と労力を要しますが、成功すれば自国を軸に2つの対立立場をまとめることができ、2日目以降がとても有利に進められます。

UAE の動きは私の想定と異なり、びっくりしました。UAE の1人は、私も何回も会議行動を見ていた生徒で、本校の生徒に「外交のモデル」として意識させていた大使です。しかし、今回は彼女が外交ではなく内政の中心に入っていたのです。しかも彼女の抜群のコミュニケーションは健在で、本校の日本ペアとも協力しながら、見事にグループをまとめ上げていました。あまりにも彼女の動きが良く、バランスも取れており、「彼女はこういう風にも動けるんだー」と改めて感心させられました。どの局面でも、どの役割でも高い次元で動け、しかもバランスもとれ、大胆ながら洗練されている。「外交のモデル」と思っていたのは私の勘違いで、彼女の動きの幅はもっと広く、柔軟だったのです。「役割を固定しない」というコンセプトのモデルであり、本校のDさんと同様、リバーシブル大使であること、そしてそのレベルの高さに驚かされました。そんな彼女を見て、改めて大使が作り出す議場ダイナミズムの可能性を教えてもらった気がします。

8 多国間交渉、多面的交渉の実現に向けて

おさらいしましょう。多国間交渉は1対1の交渉ではなく、複数の当事者を同時に交渉のテーブルにつかせていくというもので、多面的交渉は複数のシナリオを担保しながら、グループではなく個々の国を小さい交渉を積み重ねてつないでいくというものでしたね。スモールベースボールで勝負する本校のペアはこの交渉力が生命線です。DR の中心に入るのももちろん大切だった

のですが、彼らの目指すべき最大のゴールは「コンバインのファシリテーターになる」ということでした。つまりコンバインは「日本のおかげです」と言われるようにする、ということでした。知識やディベートではかなわない部分があっても、彼らはコミュニケーションベースのアプローチであれば必ず中心になれる自信がありました。実は、本校の交渉は最初からコンバインでのファシリテーションを見据えてシミュレーションをしています。足を使い、苦しいのを乗り越え、クリップ型交渉を実現していけば「日本やエクアドルなしではコンバインができない」という状況が必ず出来上がります。というより、その状況を作り出すのが外交の仕事です。今回は日本のBさんのコミュニケーションは抜群でした。動き出しが遅いこととハードネゴシエーションが苦手ということが彼女の課題でしたが、今回は最初からフルスロットルで動き、交渉のクオリティもとても高く、手前味噌ながら「彼女が議場のダイナミズムを作り上げた」と言えるほど交渉力で、彼女がコンバインのキーパーソンになると初日の段階で確信できました。彼女自身は思い通りにいかなかったと反省していましたが、それは周りのレベルも高かっただけで、十分力を発揮し、ゴールも達成できていたでしょう。

さて、事前には明かせませんでしたが、多面的交渉、多国間交渉には様々な戦術やアプローチがあります。テクニックも含めて、いくつか紹介します。エクアドル、日本に交渉された国は、思い起こせば、これらの戦術が使われていたかもしれませんね。

① 議場の形と位置を把握する

議場把握の基本中の基本です。グループを形成する際、そして議場の把握をする際に「議場の形と位置」というもっともシンプルな把握から始めます。本校ペアに「30秒ぐらい水飲みながらゆっくり議場を見渡す時間を作るように」というアドバイスをしているということは前に述べましたが、その間に何をするのか。円が崩れているグループがないか、円に入りそびれている国はないか、お互い違うグループが接近した場所でアンモデしていないか、ということです。簡単に言うと、集まっているグループの円がぐちゃぐちゃだったり、崩れたり、入りそびれている国がいたりすると、簡単に個別交渉を仕掛けられるのです。DR リーダーになればなるほど中しか見えなくなるので、この基本をおろそかにしてしまいます。意外と自分たちのグループが崩れていることに気づきませんし、説明やDR作成に夢中になっていて、グループ内温度差や各国の国益判断を見逃していることが多々あります。

このようなことを起点にクリップ型交渉を仕掛けていきます。これを仕掛けられたグループは切り崩されていくので、ボディーブローのように効いていきます。実際に過去の会議でBさんは交渉の優位性を何回も逆転させています。だから「最初は3か国集まればいい、あとはBさんがなんとでもする」のです。グループの乱れはクリップ型交渉にかっこうの餌を自らまいていると思ってください。アンモデをやると議場の中央が空き、議場の前後に固まる傾向がありますが、仮に複数のグループが隣接した場所でごちゃごちゃしていたら、「切り崩してください」と言っているようなものです。ですので、

外交は別グループの乱れや不協和音を見逃さないように意識するとともに、自分のグループも外から冷静に見て、不協和音や乱れがないか、外から切り崩されていないかを内政に報告・修正指示をします。Bさんは外からA君に指示をする役割も担っていました。

② 1対1の交渉時間を短くして、複数の関係諸国を集める

初期のアンモデで、特定の国と1対1で話し込んでしまうことは避けなくてはなりません。そのために、交渉が難航しそうな場合は、重要視する論点や国益を簡単にヒアリングし、すぐに第3者を入れた多国間の議論に引き込みます。例えば、「それならこの国も似ていると思うから、一緒に話してみよう」とその中間点に立てる第3者のところに連れて行き、一緒に交渉を始めます。クリップ型交渉はグループを1つにまとめるのではなく、国と国をどんどんつなげていくことが重要です。そのために、なるべく多くの国とコンタクトを取り、できるだけ多くの関係性を築いていくために多国間交渉を行います。また、時に2対1といった数的優位をうまく利用するという目的があります(つまり第三者といっても、なるべく自国に都合の良い議論になる相手を加えていくのがベストです)。エクアドルは特に多国間交渉を意識しており、その練習してきました。Dさんは1対1の交渉時間はファーストコンタクトにとどめて、そのあとは常に複数の国を巻き込んでの話し合いを仕掛けていたはずで、いつの間にかほかの国が入っていたなんて場面も多くあったのではないのでしょうか。

③ 交渉のテーブルに載らない相手には、お互いの国益整理をしてクリップだけを付けておく。

交渉はうまくいかななくても、相手にとりあえずクリップだけはくっつけておきます。グループに入れ込めない国、交渉が折り合わない国とも積極的に話をして、どこが合うのか、どこが合わないのかを判断をしていき、相手に整理して提示します。「こことここを整理すれば、コンバインのときにすり合わせていけるかもね」という形で、接点を積み重ね、後の交渉につなげていきます。これを地道にやることで、コンバインファシリテーターとして圧倒的な役割を後々果たすことができます。

④ 外交は総論だけで勝負。各論は内政もしくはパートナー国に任せる。

事前アドバイスでも「総論でまとめ、各論で議論する」という交渉の大鉄則を示しました通り、外交は大枠合意だけにとどめ、なるべく各論の議論はしないようにします。どんなに近い立場にあっても細かい各論は必ずぶつかります。特にアウター、ミドル、アウトレンジのグループに仕掛けていかなくてはならない外交はそれだけ交渉も難航します。そこで各論にまで入り込んでしまうと足止めされてしまいますよね。クリップ型は小さい交渉を積み重ねていくことに意味があるので、コストパフォーマンスを落とさずに回していくことが重要になります。ですので、外交は、特に前半は総論ベースの交渉で、コンバイン局面からどんどん細かい議論を入れていくことになります。

⑤ グループ内でパートナー国を作り、「納得させる」側の役割を増やしていく。

例えば自分が DR の中心にいるときに、他の国が途中から加わったとします。途中から入った国にも説明や交渉をしないといけない、でも自分は今 DR を仕切っている、、、そういう状況ならどうしますか。（もちろん総論合意はできるだけ外交が取り付け、説明しながらグループに引き込んでいきます）。自分は DR を仕切っていて、手いっぱいなので「パートナー国に途中参加の説明をお願いする」ということが普通は答えとして挙がってくると思います。もちろんそれでいいでしょう。しかし、本校でシミュレーションしているもう1つの動きは「あえて DR の中心を他国にスイッチしてもらい、自分がアウトグループをまとめに行く」というものです。「常に DR の中心にいないといけない」、「DR の中心は譲りたくない」という虚構と自分中心精神を捨て去り、信頼してパートナーに任せるということです。

この行動を納得度という観点から考えてみましょう。交渉のゴールは納得の質と量を高め、納得度を高めていくことです。「納得する当事者」を増やしていきたいわけですね。でも、「納得する側」ではなくて、自分たちと協力して「納得させる側の当事者」が増えるともっと強いグループになれると思いませんか。自分一人が納得させて、周りが納得していくより、自分以外にも「納得させる側」を担ってくれる国がどんどん増えていけば、より主体的に、より拡散的に交渉ができます（そこは役割の振り方ということも練習しています）。そして「納得する側」よりも「納得させる側」の方がより責任感を持って会議行動を遂行してくれますし、がっちりタッグを組めるはずですよ。ここで言いたいことは、「DR の中心にいる」というのは、実は必ずしも「グループの真ん中に立っていること」ではなくて、「グループの交渉力の輪を波及させ、納得度を高めるプロセスの真ん中にあること」だということです。

⑥ グループ内で複数の核を作り、グループ内コンバインをする

④とつながる話ですが、グループの仕切り方は1極集中である必要がありません。パートナー国と分担して、2つ、3つの小グループに切り分けていてもいいわけですね。前に「シングルで動く」の箇所で「自国内でコンバインをする」という考えを書きましたが、同じようにグループ内で小コンバインをしていくこともできます。雑多に全体で一気に議論を行うよりは、むしろその方が効率的に各国の国益を整理していくことができるでしょう。グループをまとめることはあくまでも DR の価値を高める手段であって、ゴールではありません。「1つのグループとして議論しなきゃいけない」という虚構は捨て去りましょう。クリップ型交渉、スモールベースボールというのは「グループ」という固定概念を破り、ゴールとビジョンに合わせて小さい交渉を積み上げていくことです。状況に合わせて、グループの在り方も柔軟に考えていけばよいのです。

⑦ ミドルグループを引き込む陣取り合戦

交渉を陣取り合戦で例えています。西から自軍、東から相手軍がお互いグループを広

げていくというゲームを思い浮かべてください。勝負どころは当然中間にあるミドルレンジのグループですよね。もちろん陣地が広い方がいいというわけではなく、無駄に数を広げる必要はありません。ただ、中間にいてどちらにもくっつく可能性がある国にいち早く仕掛けていくことが重要なのは異論の余地がないと思います。インナーグループを強固にして DR を作るのと同時に、アウターはもちろん、ミドルレンジにどう仕掛けるのか、アプローチやタイミングも含めて考えていきます。

⑧ ミドルグループ、アウトレンジに仕掛けるタイミングを見極める。

前述のとおり、本校のペアは最初の段階から「コンバインのファシリテーターになること」を見据えて、シミュレーションをしています。そのため、上述のミドルグループだけでなく、アウトレンジグループにどのタイミングで仕掛けるのかをかなり早い段階から判断していたはずです。

そこでBさんがトレーニングしたミドルレンジ、アウトレンジの仕掛け方を1つ紹介します。いきなり他のグループにオブザーバーとして議論参加するというやり方です。たぶん彼女は「ここに入って話を聞いてもいいですか」という言い方から切り出すことが多いと思います。相手の議論の話を割ってでも強引に入っていきます。そこでそのグループの議論と各国の入り込み方や国益を把握、判断をしていきます。入り込めていなくて、自分のグループに一致しそうな国は個別に交渉を仕掛けることもあります。そして、オブザーバーとして入っていきながらも、いつの間にか「聞いているだけ」から議論にどんどん参加していき、自分たちの DR を説明したり、論点を整理する役割をしながら、交渉の種をまいていきます。場合によっては、第2アンモデぐらいからこのような動きを見せることもあり、その中でコンバインファシリテーターとしてキーとなる国と争点を見極めていきます。ここでクリップをいっぱい仕掛けて、後でつながれるようにしておきます。彼女はすいぶん上手に他グループに交渉を仕掛けることができるようになりました。

⑨ 多国間コンバイン交渉

多国間交渉の最大の見せ場が多国間によるコンバイン交渉です。それについて、フロントから事後フィードバックで以下のようなコメントをもらっています。

外交に行く際、特に理由を説明せずに「ペアの片方集まってください」という大使が多い中、Bさんが「交渉を日本だけが行って、コンバイン交渉が日本の意見に偏ることを防ぎ、多国間交渉を行うために、外交に興味のある大使の方はこちらに来て下さい。」と言っていたことです。改めて交渉の際にたくさんの国を巻き込む意義を実感しました。

これは完全に意図して実践した行動です。私は3対3ぐらいが理想と言っています。2対2だと後で述べるような次の多国間交渉ができなくなってしまうので。相手のグルー

プから3か国、自分のグループから3か国です。そこで一気に当事者を増やして、納得度とダイナミズムを保持しながらコンバインを仕掛けていくのです。この多国間コンバイン交渉には「プロセスの納得度が DR の納得度、強度に直結する」という根本的な考えが底にあります。「誰かの解決策」ではなくて「みんなの解決策」にしていくプロセスを大切にすることが解決策自体の価値を高めることになるということです（これは解決策の「正統性」という部分につながると思います）。

3 対 3 のコンバイン交渉はやはり総論の合意から始めます。そして総論がすり合せてきそうになったら、その場を 3~4 か国に任せて、自分を含めた残りの 1~2 カ国を引き連れて、次のグループに多国間交渉を持ち込みます。最初のコンバインの各論議論は残りの国に任せながら、自分がファシリテーターとして調整をしていくのです。もちろんファシリテーターになる場合は、すべてのグループを行き来しながら、オーガナイズし、調整、接続させていきます。この役目を本校の外交は狙っており、そのためにすべての外交をしていたといっても過言ではありません。なので、今回もあらゆるコンバインの局面に B さんの姿があったのではないのでしょうか。

実はいきなり多国間交渉を実現させたわけではありません。まず 1 日目に足がパンパンになるまでクリップ交渉を仕掛けていました。そして 1 日目の夜に全ての DR を洗い、特徴や相違点を把握します。それによって 2 日目に向けてコンバインシミュレーションをしていきます。日本は、下にある DR 相違点の表を作って、グループ内外で配り、2 日目の交渉を始めました。さらに、2 日目第 1 弾のメモが勝負です。実はこのメモ回しは相当重要視していました。コンバイン相手、多国間交渉に引き込みたい国にメモで根回しを相当していたはずで、コンバインの際の役割をどう振っていくのかも B さんの頭の中では構想があったことでしょう。

ちなみに日本は、内政では UAE に 1 つ上手を取られていたので、2 日目は UAE に主導権争いのバトルを仕掛けても分が悪く、また DR グループ内の意見がまとまり切っていなかった段階でしたので得策ではありませんでした。なので、2 日目はお互いにとって信頼できるパートナーになることが主眼でした。その中で B さんがコンバインの最大のキーパーソンになることだけは絶対に譲らず、最大限日本の価値を高めたいと考えていました。「コンバイン交渉だけは UAE とも顔は笑顔で、足で蹴りあえ」とアドバイスを出していました

JAPANESE 12/27	
DR ごとの相違点	
(括弧の中は主文の番号です)	
DR1 と DR2 の相違点	
① 途上国の研究機関に先進国や銀行は支援を行うこと(2)	
② 非正規移民に対して GDP,移民受け入れ数で支援すること(6-a)	
③ 移民ルートを増やす(7)	
④ 先進国は飢えに苦しむ移民を受け入れる(20)	
⑤ 非正規移民に教育(21)	
DR1 と DR3 の相違点	
① 頭脳流出において、他国が成功した政策をほかの国にもすること(1,2)	
② 移住労働者に対する補償金制度の導入(4)	
③ 先進国に低技能移民を送る(5)	
④ 国境警備は、国の任意によるもの(7)	

A 君の振り返りより ― 1 日目の夜にすべきこと

- ① DR 和訳(自分たちの DR も含めて)
- ② 自分以外の DR で、質問を各最低でも 3～4 個は考えておく
- ③ 自分の DR 内で、自国の提案した文言が入っている場合は特に、その点についてクリアにしておく。また、それについて出る可能性がある質問に答えられるようにし、余裕があれば他の文言についても質問を考える。
質問は、不明確な点をはっきりする、現実性について、矛盾点などを特に探す。
- ④ 2 日目にどのような動きをするのか、分単位で考え、ペアと確認を取る。
- ⑤ 自分以外の DR について、自分の DR と何が違うのか、その違う点について自分たちの国益に OK なのか、もし国益を損なっているのならどのような改善策(Win-win が望ましい)が提案できそうか。を考える。

9 エクアドルの動き方

エクアドルの C 君、D さんの後半の動き方について非公表だった部分です。「役割を固定せずに状況と特性に合わせて柔軟に動く」という観点をより具体的に考えてみましょう。

実は C 君には決定的な穴があります。苦手なパソコン作業をほぼ放棄しているため、DR 作成の実務がペア内で偏らざるを得ないのです。それは特性として認めつつ、その穴を埋めながら、彼のはハードコミュニケーションも担えるスキルと強さをどう使うのかが課題になるのです。

特に問題になるのが、DR 作成からコンバインを見据えた段階です。誰が DR をまとめていくのかという話ですね。他の国にパソコンを打ってもらうというのも考えられるし、でも、もし中心に入るのなら、どちらが内政に入るのか?、..、1 つ目のシナリオは、クリップ型やコンバインのファシリテートを重視するアプローチで、D さんが外交に特化していく案です（日本と同じアプローチですね）。場合によっては 2 人とも外交だけということもありでした。2 つ目のシナリオは、他のグループで激しく対峙する荒れた会議になった場合は、パワーコミュニケーションができる C 君がコンバイン交渉の役を担うことを想定していました。簡単に要点を言うと、内政と外政、よりハードな交渉が必要とされるほうを C 君が当たりに行くということです。特にエクアドルのような中間的な国は、柔軟な政策議論と駆け引きがコンバイン段階でできる余地が残っているので、それによって役割を入れ替えたり、2 人で外交に特化したりと、いくつかの動き方を担保していました。

最後に

さて、いかがでしたでしょうか。A 議場にいた人はもちろん、それ以外の人にも今後の会議行動を考えるヒントになったのであれば幸いです。

全体でも共有しましたが、本校の2ペアも最初は本当に何もできませんでした。悔しい思いもあり、泣いて帰ったこともありました。その彼らが変わったのはやはりみなさんとのつながり、そして刺激です。実は、私がここまで細かく指導するようになったのは昨年の夏前からです。Bさんが私のところに来て、「毎日泣かされてもいいから強くしてほしい」とお願いしに来たのです。彼女の中にはどうしても強豪校に追いつくんだという決意があったのです。彼らが本当に変わったのはそこからです。毎回私からきつい課題を与えられるし、会議が終わるとダメ出しがバンバン出されるし、でも、苦しいと口に出しながらも毎回それを乗り越えてくれました。

そして、もう1つ彼らにとって重要だったことは直前に参加したある会議での失敗です。そこは中級者会議ということもあり、本校の日本、エクアドルを担当した2ペアが議場をほぼ仕切る展開になりました。この会議でエクアドルはとても良い動きをし、最優秀をいただいたのですが、日本の2人は終始議場を仕切りながらも、会議参加の意識に大きな問題があり、「評価する価値なし」とまで、私が叱った会議です。その後3時間の反省会が行われ、A君もBさんも灰色になった「明日のジョー」のように落ち込んだのです。しかし、彼らが「あの会議で失敗してよかった」と振り返るほど、この失敗が大きな成長につながりました。そこから私たちが繰り返し口に出していた言葉、それは今回のフロントがメッセージとしてくれた「原点回帰」でした。チャレンジャーとしての思いを忘れずに、泥臭くがむしゃらにそして真摯に自分たちのベストを尽くす、、大きな失敗をしたからこそ、その姿勢をもう一度取り戻して今回の会議に臨むことができました。

まだまだ未熟な部分はありませんでしたが、おかげさまで彼らにとっても素晴らしい会議になり、また皆さんにも多くの還元ができ、バトンをつなげたのではないかな、と個人的に思っております。今回の会議が参加したすべての方にとって何かしらの意味を持ち、そして今会議で皆さんがまいた種が未来の模擬国連につながっていくことを心より祈念いたします。

最後の最後： A 君の振り返りより

A 君が今回の会議の振り返りを15ページにわたって書いてくれました。当日の細かい会議の動きも書いてくれているのですが、ここでは今後の模擬国連を目指す皆さんに向けて総括のメッセージを共有させていただきます。（言葉などは私の方で編集している部分があります。）

模擬国連を始めたのは高1の時の担任とC君のすすめでした。今になったから言えることですが、模擬国連を始めた理由は高1の夏休みの宿題で「外部イベントに参加しよう」というものがあり、模擬国連がその宿題として認められるからでした。それまでは別に国連とか興味なかったし、また参加すると決めてからも国連に興味がわいてくることや、他校の同級生の素晴らしい人を見ようなどという気持ちは全くありませんでした。中学の時から理系に進むと決めていたので、社会系の要素が強い模擬国連など自分に関係ないという気持ちがあったのも事実です。さらに、当時の自分は積極性を養おうとか人とコミュニケーションを取ろうという意思もなく、「とりあえず出ておこう」みたいな感じで、最初で最後、その後は続ける気もありませんでした。2016年夏のかえつ大会が私にとっての初めての会議でしたが、ただただ早く終わってほしいと思うだけでした。

しかし、そこで目にしたのは「異常に熱い、議論が交わされている場」でした。私のパートナーだったC君はもともと目立つ存在で、そして積極性や説得しようとすることに富んでいるので、初参加にも関わらず、色々な人と交渉し、とても楽しんでいるように見えました。一方で、私は「仲良しクラブみたいな感じで議論できればいい」としか思っていませんでした。そんな感じだったので、何が起きているのか分からないまま1日目の会議が終了しました。正直こりごりでした。ただ、一緒にグループを組んだ大使たちが「積極的に自分たちのDRをよりよくしよう」と熱意をもって取り組んでいた姿は印象に残りました。

もともと宿題のためという不純な動機だったので、2回目の参加など考えていませんでした。しばらくたつと、その年の冬、また本校で模擬国連が開催されるという知らせが届きました。「もう出ない」はずが、なんで気持ちが変わったのか、、、その理由をはっきりとは覚えていませんが（親とペアと先生たちの勧め?）私はなぜか模擬国連に2回目の参加をしました。もしかしたらその時は1日会議であったからという要因もあったかもしれません。議題は核軍縮で、再度C君とチームを組みました。夏に様子がわかっていたこともあり、せっかくならすこしは頑張ってみようと思い、この時初めてDRを用意して会議に臨みました。その会議では、当時韓国大使であった渋幕の先輩とコンパインをしました。その先輩は夏の会議で議長として議場を仕切っていた人で、夏にはその人と話せるとは思ってもいませんでした。そこで模擬国連に関するいろいろなことを教わりました。それ以外のことは正直ほとんど覚えていません。ただ、1つ言えることはこの会議がなければたぶん自分の模擬国連人生はここで終わっていました。理由は2つあります。まず、1つ目は「リーダー」になれることの喜びを感じられたこと。そして2つ目は、渋幕

の先輩をはじめ、いろいろな大使に「模擬国連の楽しさを教えてもらったこと」です。この辺から、自分の気持ちが少しずつ変わり始め、「模擬でありながらも国際社会上の問題や改善策を同じ世代の高校生と議論ができる」という魅力が分かり、模擬国連に対する自分の姿勢が確立していった気がします。

他にも、2017年2月には玉川学園SGH会議があり、Honorable Mention 賞をいただくことができました。そして、3月の渋谷浅野会議、6月の聖光会議と参加し、他校の方たちとより親密な交流をさせていただき、つながりが広がっていくようになりました。夏のかえつ大会では会議監督を務め、新たな視点から模擬国連の奥深さを知ることもできたとし、渋谷の先輩の翌年に同じ会議で自分がフロントをしているということも嬉しいことでした。そうやってゼロだった模擬国連との関わりが、いつの間にか自分の中でも大切なものに育っていったのです。

模擬国連をやっている人は、誰でも最初は失敗をして、もうやりたくないという気持ちになる可能性が高いです。私も2016年の間はずっとやめようと思っていました。そこでやるかか辞めるかは自分の判断ですし、辞めることが悪いわけではありませんが、私は何回も模擬国連をやめようと思うたび、「模擬国連をやめたら、またいろいろなことに関心の持てない高校生に戻ってしまうぞ。それでいいのか？」という気持ちがありました。私たちは、全日大会といういわば模擬国連の甲子園では予選で落ちてしまいましたが、その結果に関わらず、1年4か月模擬国連に取り組んできたことは自分にとって変わらぬ財産です。交渉力や説得力・コミュニケーション能力は前と比べて上がったと確信していますし、英語力も伸びたと思っています。そして学外の高校生とも仲良くなることができ、一緒に反省会をしたり、議論したりすることができるようになりました。

自分の人生は自分で決めるものであるから強制はしないけど、模擬国連というものをやることにより人間として成長できる。もちろん辛いこともあるけど（特に最初に出たときなんか絶望したくなる時もあるけど）、それを乗り越えることにより成長できる。最初は後ろ向きだったからこそ、自分の経験と思いをみなさんにつなげ、今後の模擬国連を応援していきたい、そう思っています。